

身近なまちの風景物語(14)

佇む記憶

城下町を歩くと、藩政期の名残を所々で感じることができる。濠や土塁であったり、屈曲した道路であったり。かつての街道沿いには古くからの商店街があり、住宅地の一角には寺町がある。ただし意識しないと感じ取れないかもしれない。

城下町を最も象徴するのは城である。天守や櫓、城門が残っていれば、視覚的に意識される。石垣や濠で囲まれた公園として開放されれば、日常的な利用によって経験的に意識される。

一方、どの城も保存されてきたわけではない。

明治維新後、近世城郭の建造物は払い下げられたり、取り壊されたりした。中には、城内の樹木や石垣の石も払い下げられて転用されたりした。このうち建造物や工作物は払い下げ後、移築されたケースもある。

笠間城の櫓建築は寺院に、城門は民家に移築された。水戸城の城門の一つは何度か移築し、現在は城址にある学校で保存されている。

こうしたケースは全国的にみられる。ただし中にはその真偽が定かではなく、言い伝えがあたかも事実のようになっていることもあるので注意が必要である。

古河城は渡良瀬川沿岸に築かれた。維新後、建造物は破却され、その後、洪水対策の河川改修に伴い城址はほとんど跡形もなくなった。

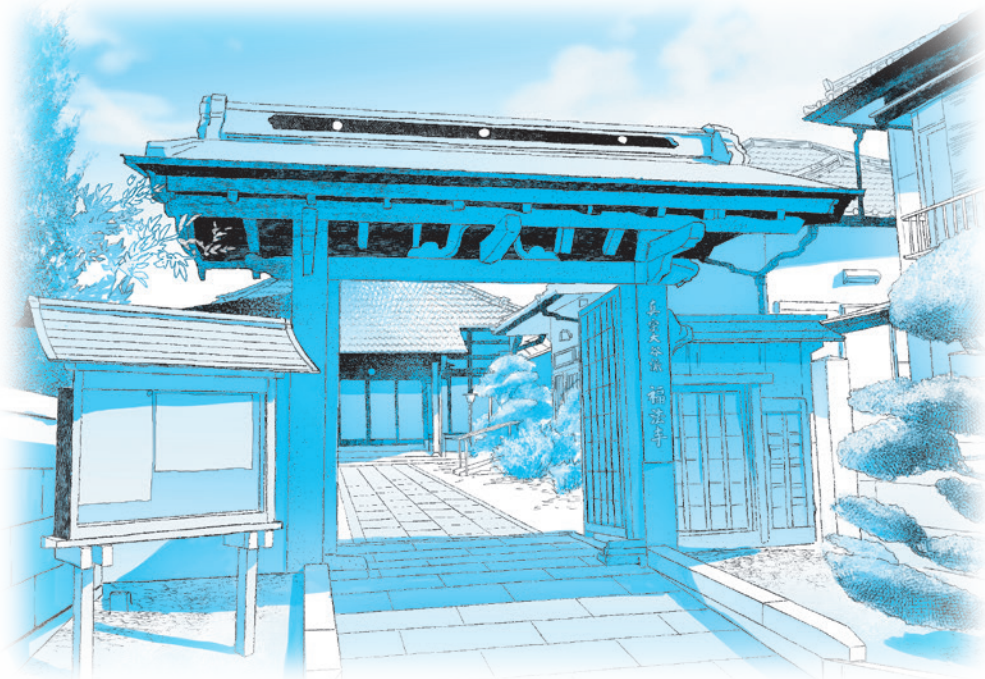
古河城址のほど近くに福法寺がある。この山門は、古河城二の丸御殿入口の乾門と呼ばれた門だった。維新後、檀家が払い下げを受け、寺に寄進したという。

ひっそりと佇むその姿に、かつての城の栄華を重ね合わせることは難しいかもしれない。寺の脇にある説明板を読んでも想像しづらい。

しかし城下町の数少ない城の遺構として極めて貴重である。場所が移り、転用されても、まちの歴史の記憶を物語ることに変わりはない。目に見える記憶の装置として継承されることに意義がある。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）